The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	まちみちのフィールドは大学にあり
Author(s)	森栗, 茂一
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 212-221
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55649
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

INTERVIEW 06

Shigekazu Morikuri × Naoki Homma

まちみちのフィールドは大学にあり

森栗 茂一

聞き手：本間直樹

PROFILE

森栗 茂一 | Shigekazu Morikuri
コミュニティ部門　教授

専門は、都市民俗学、コミュニティコミュニケーション。民俗学を出発点としつつ、各地で住民協働型交通まちづくりに関わる（土木工学の領域以外の専門家）。観光ツーリズム、復興住宅コミュニティづくり、住民の協働による合意形成を通して、全国を寅さんのように渡り歩いている。

大切なのは、物語を皆で紡いでいくこと

―― この 10 年を振り返って、CSCD において目指されたことやその実践について伺いたいと思います。さらに 2013 年に新しくできた寄附研究部門 (*a) で取り組まれていること、その展開や将来への展望もお聞かせください。

振り返りますと、2005 年に CSCD ができた時、大阪外大に所属していた私は直接 CSCD に電話を掛けて「どんな組織ですか」と尋ねたことがあります。それぐらい憧れていた組織に 2007 年に阪大と外大との合併にともなって移籍することができ、夢のような気持ちで過ごさせてもらいました。

もともと私の専門は民俗学でしたが、1995 年の阪神大震災以降、まちづくりに取り組むようになりました。CSCD に移った際、確か鷲田清一先生も「まちづくり」をテーマに掲げておられたと思いますが、「臨床部門」や「アート部門」、「科学技術部門」などに比べて「まちづくり」については実際にはあまり進んでいなかったように思います。

2008 年からはいろいろな経緯もあって授業をたくさん受け持ち、死にもの狂いの大変さでした。でもいろいろな学生に出会えてとてもおもしろかった。初期の頃「大阪大学の者が大阪を知らなくてどうするのだ」と、大阪の町をあちこち連れて回ったり、適塾 (*b) で正座させて議論したことも懐かしい思い出です。中でも彼らを私のフィールドワークの現場に連れて行き、町の魅力や特色、物語などを語っていくのはとても楽しいことでした。地域のいろいろな語りを聞き、それを自分の中で編集して伝えていく。阪神大震災以後の経験、協働の取り組み (*c) を授業にできたことは、忙しかったけれども大変有意義でした。

実は最近わかったことは、やめたつもりでいた民俗学が、実はまちづくりとか、地域づくり、土木計画においては大切だということです。

―― それはどういうことですか。

まちづくり計画というものは、どんなに精緻な数値をもって説明しても人々を納得させられるものではありません。昔みたいに社会経済が右肩上がりならともかく、右肩下がりで縮小傾向にある今のスマートシュリンクの時代においては総合的に課題をクリアするのは難しく、みんなで話し合ったり考えたりして一つの物語を紡いでいかなければいけない。つまり本当のイノベーションは他所から持ってきたプランや他人に計画してもらうものではなく、地域にあるものを皆で共有しつつ練り上げていくプロセスにある。まちづくりは、個々のエピソードの中にあると、まちづくりの評論家、ジェイコブズは『発展する地域 衰退する地域』という本の中に書いています。これはまさしく「民俗誌」です。つまり、こんなふうに努力をしてこんなまちづくりをしたという地域づくりの物語を記述し、それを二次的に解釈して役立てるのが今日のまちづくりや国土政策では極めて重要なことなのです。

―― そこに至るまでの話をさかのぼって伺えますか。

私は 2005 年頃からまちづくりに関する協働の仕事の依頼を受けるようになりました。最初は地域の公共交通の整備についてでした。住民をはじめ皆でよく話し合って、バスのない地域にバスを走らせてみたら、予算ゼロで成功してしまったのです。それが神戸市東灘区住吉台での「くるくるバス」の取り組み (*d) です。「バスの問題はバス会社に任せておけばいいじゃないか」というのが従来の考え方ですが、それでは縮小する時代はうまくいきません。バス会社など事業者は事業者の立場、行政は行政の立場、市民は市民の立場、お互いの状況をみて、要求するだけではなく、皆で話し合い、互いによくわかり合って、限られた予算の中で「このくらいのところで行きましょう」と皆で仕組みをつくりあげていく、そういう時代になってきています。

実は、道はまちづくりの一番の基本です。家や職場から一歩出れば必ず道ですから、ものすごく大切です。しかし「そんなの役所がするべきことでしょう」と市民は今まで他人事だったと思います。地域福祉や環境美化、防犯、防災、子育て支援などの問題はまちづくりの一環として市民にも容易に理解されます。だけどバスや鉄道、道路などのインフラは違う。バスや鉄道は事業者のサービス、事業者の都合で提供される。道路も役所の計画、都合で整備される。右肩上がりの時代はそれで良かったが、今は皆で話し合い、関わっていくことが必要になった。気がつけば私は協働型の交通まちづくりの専門家になっていました。思えば激動の 50 代でした。

まちづくりをめぐるエピソード
～「くるくるバス」と「歩きたくなるまちづくり」

―― 日本の歴史の中で、なぜまちづくりはそうなってしまったのでしょう。

日本が急速に先進国化したからです。戦後、何もない中で人口はどんどん増えていき、都市化が進む。急速に交通網を整備しないといけない、道路もガンガンつくらねばならない時代があったのです。でも今は、クルマに頼りすぎないまちづくりの中で公共交通を考えねばならない。道路の維持管理と道路の使い方（自転車道やオープンカフェなど）が問われている。

一方、国土交通省の中でも、まちづくり（都市局）は「地区計画」をたて、住民と「協働」でやらないといけないという考えが以前からありました。正確に言うと 1995 年の阪神大震災前後からです。ワークショップという対話技法が一般化したのもその頃です。今後は協働のみちづくり、道だけでなく町と道とを一緒に考えていかないといけないでしょうね。道路局の中にも「国道の整備、維持管理」が仕事だと思いこんでいる人がいますので、それに別の新たな方向性やインパクトを与えるところに、私たちの寄附研究の意味があると思います。

―― 以前「くるくるバスのお話を伺った時［Communication-Design 2 号 2009］にも、プランの前にビジョンがあり、さらにその前にドリームが必要だとおっしゃっていましたね。

今はそれらを皆で共有化して、一つの物語に紡いでいきたい。つまりもっと多くの人にきちんと広げていきたいのです。ビジョンを考えるプロセスをまちづくり、みちづくりの制度にまで引き上げることに関わりたいと考えています。例えば高速道路を設計する前には予備調査が入りますが、実はその前に物語づくりが必要じゃないかと。高速道路ができた後のストック評価も大切ですね。それは費用対効果の数値評価だけでなく、人々はどのような夢が実現できたか、どう感じているかなど、物語評価も必要な時代になっていると思います。

―― 紡がれる物語とは、いろいろな小さなエピソードの集積のようなものでしょうか。

地域での議論は、最初はとまどいが多いけれども、意見がまとまっていくとそのうち言わなくても皆がどんどん動いていきます。私はそれをエスノグラフィの形で事細かに書くというより、極めて主観的ではあるものの、どういう流れで物事が動いていったのか、ハナシの筋（民俗学者、宮本常一の表現）が重要と考えています。

具体的な例で言えば、高知県須崎市の「道の駅」(*e)。これも寄附講座に着目した市長から依頼されたものですが、この町は人口が急減し、大変です。行政はお金がなくて政策が打てない。市民も役所に対して不信感がある。市長のなり手もないという状況の中、地元高校の元野球部の企業人が「このままでは地域が崩壊する」と手を挙げて市長になったものの、誰も動きません。そこで、「道の駅」を中心に地域づくりをすると決めた上で相談に来られたのです。何度も足を運び、「道の駅」をベースにして市民の議論と市役所の議論を結びつけていくことで、市民も市役所も互いに動きはじめました。その動きを物語的に読めるような形にしておけば、他の町にとっても参考になります。この物語化が大切で、それをどのように解釈するかは、読み手に委ねればいいと思っています。

もう一つエピソードをお話しますと、沖縄県のある町の市役所で若手職員 35 人程を対象にワークショップを行いました。その市役所では 400 人の職員の 95% がクルマで通勤しているのに、3 年後に移転する市役所が町の真ん中に予定され、駐車場をあまりつくれない。「じゃあ、歩きたくなるまちづくりをしよう」ということになり、議論を始めると「道路を片側 2 車線に拡幅して 1 車線はバスと自転車専用にしてしまおう」とか「通勤手当はクルマではなく自転車と徒歩の人に出そう」などといった意見がワーッと出てきたのです。それを横で聞いていた市長が「やろう」と決断して、3 年計画で実施することが半日で決まってしまいました。

―― たった半日でですか。

ええ、おもしろいでしょう。皆が方向性を一つに持てば、一気に決まってしまう。実はそれは一人の女性職員の言葉が発端でした。クルマ通勤廃止をめぐる議論の中で、その女性が「クルマ通勤ができなくなると、子供を送り迎えすることで何とか夫婦共働きしている生活が潰れる。何も好きでクルマに乗っているんじゃない」と言ったのです。じゃあどうしたら歩きたくなる町になるかといえば、通勤手当を変えればいいのです。クルマを使わなくてもゆったりと子供の送り迎えができ、勤務もちゃんとできるようなワークライフバランスに配慮した職場にした

いという議論になりました。クルマに頼らないまちづくり、歩きたくなるまちづくり、そしてワークライフバランスのとれた暮らしは全部つながっています。保育所をどう運営するかもつながっている。福祉の部局、都市計画の部局、道路建設の部局の個別の話ではなく連関していることが対話の中で意識され、まちづくりの方向が見えてきました。

知識と経験を実践につなげるために

―― まちづくりと大学教育の関係について伺えますか。

今「まち･みちづくり」をテーマにした授業 (*f) をしています。その中の「演習Ⅰ」ではまち･みちづくりの対話法の授業を行いました。

―― それはどういうものですか。

ファシリテーションとか、メディエーション、モデレーションといった対話法の技法を 4 日間かけて具体的な事例をもとに、実習体験をしてもらいます。その中でわかってきたことは、技法も大切だけれど、もっと大切なのはエピソード（ハナシ）だということです。学生もそちらのほうをおもしろがりました。どんな対話法を使ったかは皆、二次的な関心で、いろいろな事例でまちづくりの展開を知りたいのです。

そこで来年はエピソードをもっとたくさん入れて、それを題材にしながら「こんな場合にこの対話法を使うと、こういうふうにうまくいった」など、エピソードに対話の技法を入れ込んだ授業にします。

―― その「対話法」とは具体的にどういうものですか。

いろいろな対話法のもとに、対話をすすめる技術が必要です。まずワークショップが有名ですね。それ以外に、時間がない時にはダイレクトにそれぞれの意見を A4 の紙に書いてもらって貼り出すこと（見える化）もします。逆に、書かないで話の場を大切にするカフェやラウンドなどの実習もします。

でも技法が先にあるのではなく、どんなまちづくりをしていくのか、まずは現場のいろいろなエピソードから学生と一緒に学びあい、その中に技法を散りばめることができると楽しそうです。その時にこれまでのエスノグラフィやエピソード集をテキストにしようと思っています。

―― エスノグラフィに関しては民俗学のご研究の積み重ねがありますが、ワークショップやコミュニケーションのスキルについては現場で磨かれたのですか。

実は CSCD で勉強したものです。中之島センターでワークショップデザインの授業 (*g) がアート部門から提供されていますね。そこでたくさんのことを学びました。あの演劇的なワークショップは有意義だけれど、それだけではバランスが悪い。いろいろ違うワークショップやファシリテーションもあることをお知らせするために、私も講師として年に 2 回、まちづくりをめぐる対話法の授業 (*h) を担当しています。

その中で感じたのは、ワークショップデザインの授業だけではなく CSCD のいろいろな科目において、もっとまちづくりの現場に近いところで実習することが重要ではないかということです。そこで知識と経験を相対化し、実践につなげる。CSCD のこの 10 年間を振り返ると、そこがちょっと弱かったかもしれません。

―― CSCD のワークショップで欠けていたものは、やはり現場での発展の可能性でしょうか。ワークショップは一時的なスキルアップにはなりますが、それが継続できるかは別問題ですね。

「こういう暮らしをしたい」「こういう地域づくりをしたい」というビジョンに応じて、状況に応じて、対話技法を使うのが本当のあり方ですが、つい技法が先に立ってしまいがちです。

―― いったいどういう課題を、誰が、何を使って、どうするかという部分で動きだせるアクションリサーチというものがなされるべきですね。でもそういうリサーチは客観的でないなど、アカデミックなリサーチと相容れない部分があって難しいですね。

確かにアクションリサーチを使った研究をすると学術的でないと言われます。簡単に言うと、それで論文を書くと学術誌の査読が通らない。科学研究費の申請も通らない。逆に言うと、学術において、体裁とかモデル化ばかり焦点が集まり、学術がどのように世の中に使われるか、応用されるかということを極力忌避する傾向を生みます。例えば土木計画学で、実際の応用とは関係なく数値モデル化だけが進行したり、形式だけが重要視されているとしたら、それは病んでいると言えるのではありませんか。

そうした危機感を持った私は、東京工業大学の桑子敏雄先生、内閣官房参与で京都大学の藤井聡先生、筑波大学の石田東生先生と 4 人で新しい雑誌をつくることになりました。名付けて「実践政策学」です。学会誌ではなく、お金を払えば投稿できるデジタルサイトでの雑誌です。もちろん査読もします。ただし先の 4 人がエディトリアルボードとなって、秘密査読でなく、減点法ではなく加点法で、どれだけ生の息吹が感じられるか、どれだけ実践可能で役に立つかといったことを評価基準にして点数を積み上げていくのです。

従来の査読は減点法が基本ですね。だからもう一つおもしろくない無難な論文ばかりが並んでしまう。本当に世の中を変えてみたいというようなアクション的な論文は載らない。そこで、そういう新しい雑誌の展開も模索しています。

夢に向かって共に歩むプロセスこそが大事

―― これまで交通や道を基本としたまちづくりに精力的に取り組んでこられた事例を伺いましたが、そこに通底するものは何でしょうか。戦後の 1950 年頃から 1990 年頃まで営々と築かれてきた昭和期の日本社会、いわゆる成長期、発展期のパラダイムが 90 年代後半からほころび出したのは、経済面だけではなく人口の問題でもあると思います。そうした中で森栗さんのお仕事は、昭和期の決算をされているような感じもします。

実は交通や道路は単なる手段であって、総合的なまちづくり、地域づくりを考えることが基本です。昨日も「特論Ⅰ」の授業を曽根崎の地下でやりました。その時に特任教授として来ていただいている交通まちづくりの土井勉先生が、「この学生の能勢電鉄沿線の地域づくりの発表は良いですね。鉄道とか、バスとか、道路にこだわっていない。地域の夢や地域づくりを中心に議論しているところが素晴らしい」と言われたのです。私もそう思いました。人の暮らしは個人だけではなく皆と共にあるわけだから、総合的な暮らしづくり、地域づくりが本当のまちづくりです。私はそれに、少しだけ挑戦してきたのかもしれません。

もう一つ、昭和期の右肩上がりの社会が変わってしまった今、その決算をしているのではないかというご指摘については、確かに右肩上がりの時は楽だったようにも感じます。しかし、よく考えると右肩上がりの時は右肩上がりにともなう大きな課題があった。人口が増えると鉄道を複線にしないといけないとか、足りないバスの回し方を考えないといけないとか、人口が集中するから交通整理や再開発などの都市計画をしないといけないとか、その対応も結構大変です。つまりそれぞれの時代には、それぞれやらないといけない課題がある。

従来のパラダイムが変化すると、人は先が見えなくなる。上昇期は見えなくても適当に決まった形のルーチンワークでどうにかなっていました。でも今はもう一度現場をよく見て、皆でどんな暮らしをしたいのかをよく考えて、再構築をはかる時代なのです。発想を転換すれば、人口が増えていく時代に比べたら、いろんなことができるかもしれません。土地も空間も町中にいっぱい余裕があるのだから何だってできる、というくらいの楽しい気持ちでやるのがいいかと思います。

―― ドリーム、夢が大事だと先におっしゃいましたが、成長期の夢は何だったのでしょうか。それは実現されたのでしょうか。

夢が実現したかどうかには、あまり関心がありません。夢を皆で共有し、そこに向かって一緒にやっていくそのプロセス自体の中に意味があるのです。人口減少や経済縮小が進む現在、特に地方は「大変だ、大変だ」と言うけれど、そんな騒ぐ時間があれば、今、地域にどんな資源があるかを探して、皆で共有化して、可能な地域づくりを一緒にやっていくほうが楽しい。資源が何もないことはない、どんな地域にも必ず何かあります。それを皆で未来に向かって考える。そして皆で考えていくプロセスを楽しむ。そういう生き方が大事なのです。自分たちでつ

くりあげていく覚悟が足らないから、「お金がない」、「人がいない」、「目標がない」と嘆くばかりになる。ちゃんと腰を低くして覚悟を定めれば、お金がなくても皆でつくれるものが意外とあると思います。

国を、地域を、暮らしを、語り合うこと

―― 民俗学的に見て、そもそも協働して暮らしを考えるというシステムを日本は持っていなかったのでしょうか。あるいは、戦後失っていってしまったのでしょうか。

専門的に言うと、近代における個人の過剰のなかで、現在はつながりの崩壊プロセスだと見ています。その中で地域の持つ特色や文化をきちんと位置づけないといけない、というのが民俗学のスタンスです。民俗学は本来、文化財学でも文献学でもありません。本当の民俗学は宮本常一がやったように、この国をどうしていくのか、私たちの暮らしをどうしていくのか、地域をどうしていくのかを一緒に語り合うことだと思います。そういう意味で、私は今、できるかどうかわからないけれども、本当の民俗学を試みようとしているのかもしれません。

近代社会が私たちの持っていたつながりをどんどん断ち切って個に分け、人と関わりたくなくなってきているのが現状です。その中で諦めるのではなく、次の時代にどんな生き方があるのか、それを地域の中から探っていかなくてはならないと思うのです。その時に重要なことは、さまざまな「一緒にこんなことやってみたい」、という地域の声を拾っていくこと。各地域それぞれがフィールドなのですが、実はその一つに「大学」というすごいフィールドがあります。授業はフィールドなのです。若い学生もこんなふうに人と関わってみたい、こんな地域づくりに関わってみたい、と結構つながりを求めています。授業というフィールドで、学生たちと一緒にどんなつながりを具体化できるのか。一緒に議論することは授業でもあり、フィールドワークでもあるのです。

そして学生から学んだことをいろいろなまちづくりの現場に返していく。逆にまちづくりの現場での人々の努力やいろいろな考え方、やり方を、妥協も含めて学生たちに学んでもらう。すると学生のほうも現場のほうもどちらも活性化します。さらには学生が現場に入っていってもおもしろいかもしれないし、現場の行政の人やまちづくりを実際にやっている市民の方、企業の方などが授業に来てもとても楽しいでしょう。互いに有機的に働くのです。

私は今 61 歳で退職が近いです。改めて何がしたかったかと言いますと、授業を大学とフィールドで分けてしまうのではなく、大学の授業の中に現場の人たちが来て、今の地域づくりに大切なことを議論したり、逆に学生が現場に行って体験する中で学ぶ。そういう高度教養の科目をつくりたい。今、大学では博士、修士だけではなく、高度職業人の養成が重要だと言われています。経営大学院や高等司法など職業人博士 (*i) の位置づけもその一つですね。

そこでは社会の第一線で活躍されているさまざまな職業人を大学が職業人博士として受け入れ、その人たちの経験や知識に加えて、大学が蓄積しているいろいろな知的資源を自由に使っ

て博士論文を書いていただき、それを学生たちと議論し切磋琢磨する。そんなことができるといいなと思います。

例えば京セラの稲盛和夫さんが一つの仕事を終えた後、仏門に入られましたね。それはきっと仏門の世界がとても重要な機能を持っているからでしょう。でも本当は稲盛さんのような方にこそ職業人博士として大阪大学に来ていただいて、学生たちと一緒に議論できるような枠組みがつくれればいい。そこに関わることができれば、夜間でも休日でも私は残された時間を死にもの狂いで働きます。どこまでできるかわかりませんが、私が何のために民俗学の枠を飛び出して、まちづくりに飛び込んだのかというと、現場と大学を結びつけるためなのです。実は寄附講座の成果をどういう形で出していくかということも手段であって、大切なのはまちづくりの現場の息吹と授業とをどう融合させるかということです。人口減少が進むこのなかなか難しいスマートシュリンクの時代において、衰退が激しいといわれる大阪で、どんな夢を皆で描けるのか、それを考えるのが私の役割ではないかと思っています。

リンク先

*a)「市民協働による道路空間コミュニケーション マネジメント」寄附研究部門：http://machimichi.com/
*b) 適塾：http://morikuri.cocolog-nifty.com/blog/2009/04/post-dd2d.html
*c) 協働の取り組み：
http://morikuri.cocolog-nifty.com/blog/files/orangebook2008_01m_20090626s_p2835.pdf
*d)「くるくるバス」の取り組み：http://bookmeter.com/b/4761513195
*e) 高知県須崎市の「道の駅」の取り組み：
https://www.skr.mlit.go.jp/road/rstation/station/susakb.html
*f)「まち・みちづくり」をテーマにした授業：
http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/pdf/syllabus2015_68-69.pdf#search='%E3%81%BE%E3%81%A1%E3%81%BF%E3%81%A1%E3%81%A5%E3%81%8F%E3%82%8A+%E6%8E%88%E6%A5%AD'
*g) ワークショップデザインの授業：http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/join/wsdtp.php
*h) まちづくりをめぐる授業：
http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/pdf/syllabus2015_66-67.pdf#search='%E3%81%BE%E3%81%A1%E3%81%A5%E3%81%8F%E3%82%8A+%E6%8E%88%E6%A5%AD+CSCD'
*i) 職業人博士：http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senmonshoku/08100810.htm